

# 音 楽 科

音楽科部 紺野 伶音 稲森 稚明

研究協力者 吉田 秀文

## 1 音楽科における「教科本質的な学び」について

感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりする学び

音楽科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」である。この見方・考え方を踏まえ、音楽科の教科本質的な学びを「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりする学び」とした。

本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、音楽科の教科本質的な学びが欠かせない。なぜなら、様々な音や音楽を表現・鑑賞することを通して、子どもたちの生活や生活を営む社会の中の様々な音楽に目を向け、音や音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりすることができるからである。また、自分と友達が生み出す音や音楽をよく聴き、音楽を深く味わったり音や音楽を通して感情や考えに共感したりする経験が、音や音楽のよさや美しさに感動する豊かな情操を育み、共によりよい生活を創造していくことにつながる。

## 2 研究の方向

音楽科の教科本質的な学びは「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりする学び」である。

教科特性に着目すると、表現領域では、目指す音楽表現に近付いたことを実感しにくい。それは、自他の表現した音や音楽を聴いて評価することが難しいからである。また、鑑賞領域では、曲を聴き深めたことを実感しにくい。それは、聴き取ったことと感じ取ったこととを結び付けながら聴くことが難しいからである。目指す音楽表現に近付いたことを聴いて実感したり、聴く観点を明確にして、感じ取ったことと結び付けられたことを実感したりできると、「自信」を深めることにつながっていく。そのために、表現領域と鑑賞領域を通して、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を聴く観点として明確にし、意識的に音や音楽を聴くことが重要である。意識的に音や音楽を聴くことができるようになり、「自信」が深まると、新たな音や音楽と出会ったときに、音楽を形づくっている要素を生かして表現したい、聴き取ったことと感じ取ったこととを結び付けながら聴きたいと、題材の終末の自分の理想の姿を想像したり、前向きに学習に取り組んだりすることができるようになるため、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりすることができると思う。

そこで、「自信」を深める学びを実現することで、共によりよい生活を創造する子どもたちを育成できると考え、研究を進めていくこととした。

### 3 研究内容

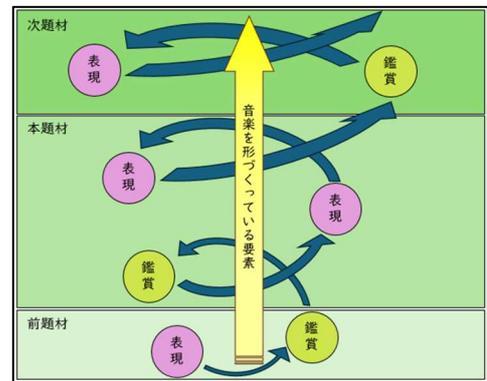
#### (1) 音楽科における「自信」

音楽科の教科本質的な学びにおける「自信」を以下の表のように捉えた。

	表現領域	鑑賞領域
自分ができる	目指す音楽表現を実現できる。	曲を聴き深めることができる。
努力すればできる	思いや意図を伝え合って、音で試したり、目指す音楽表現の実現度を評価・判断したりすることを繰り返せば、目指す音楽表現を実現できる。	自他の聴き取ったことと感じ取ったことを結び付ければ、曲を聴き深めることができる。
認められている	自分の思いや意図を表出しても受け入れてもらえる。	自分の聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けた考えを表出しても受け入れてもらえる。

#### (2) 「自信」を深める学び

音楽科の「自信」を深める学びは、「題材を越えて表現と鑑賞を往還しながら、様々な音や音楽と繰り返し関わり、表現を高めたり鑑賞を深めたりできたことを実感する学び」である。(図1) 友達と表現や鑑賞をする中で、自分の表現の高まりや鑑賞の深まりを実感することができると「自信」を深めることができる。そのために、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を軸として、題材を越えて表現と鑑賞を往還しながら様々な音や音楽と繰り返し関わるのが重要である。表現領域で、目指す音楽表現を実現するために、よりどころとなる音楽を形づくっている要素の働きを生かすことが有効と分かれば、鑑賞領域でも感じ取ったことと結び付けながら曲を聴くために、同じ要素の働きを聴く観点として使うことができる。また、鑑賞領域の中で聴く観点としたよりどころとなる音楽を形づくっている要素を、目指す音楽表現の実現のために生かすことや、表現領域同士、鑑賞領域同士で生かすこともある。このように、題材内や同系統の題材で繰り返し表現と鑑賞を往還することで、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を軸とするため、聴く観点が明確になり、目指す音楽表現に近付いたことや曲を聴き深めたことをより実感することができ、「自信」を深めることにつながる。その中で、題材の最初に題材の終末の理想の姿を共有し、達成するために必要な追求の見通しをもつことで、主体的に学習に取り組むことができる。このように、題材を越えてよりどころとなる音楽を形づくっている要素と出会い、題材を通して意識的に聴く観点を明確にし、主体的に学習に取り組み、音で聴いて自分の表現の高まりや鑑賞の深まりを実感することができると、「自信」が深まると考える。



<図1 音楽科の自信を深める学び>

表現領域で、目指す音楽表現を実現するために、よりどころとなる音楽を形づくっている要素の働きを生かすことが有効と分かれば、鑑賞領域でも感じ取ったことと結び付けながら曲を聴くために、同じ要素の働きを聴く観点として使うことができる。また、鑑賞領域の中で聴く観点としたよりどころとなる音楽を形づくっている要素を、目指す音楽表現の実現のために生かすことや、表現領域同士、鑑賞領域同士で生かすこともある。このように、題材内や同系統の題材で繰り返し表現と鑑賞を往還することで、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を軸とするため、聴く観点が明確になり、目指す音楽表現に近付いたことや曲を聴き深めたことをより実感することができ、「自信」を深めることにつながる。その中で、題材の最初に題材の終末の理想の姿を共有し、達成するために必要な追求の見通しをもつことで、主体的に学習に取り組むことができる。このように、題材を越えてよりどころとなる音楽を形づくっている要素と出会い、題材を通して意識的に聴く観点を明確にし、主体的に学習に取り組み、音で聴いて自分の表現の高まりや鑑賞の深まりを実感することができると、「自信」が深まると考える。

#### (3) 「自信」を深める学びに求められる子どもの様子

音楽科における「自信」を深める学びに求められる子どもの様子を問題解決的な学習の過程に沿って表すと以下のようになる。

問題解決的な学習の過程	求められる子どもの様子	
	表現領域	鑑賞領域
【であう】過程	【自分事として音楽表現の高まりや鑑賞の深まりに向けて関わること】	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現や鑑賞をすることに前向きに取り組もうとしている。</li> <li>・題材の終末の理想の姿を希望をもって伝えている。</li> <li>・題材の終末の理想の姿に近付くために必要なことを前向きに考えている。</li> </ul>	

【追求する過程】	【自分事として音楽表現の高まりや鑑賞の深まりに向けて関わること】	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の思いや意図を結び付けた表現を試したり聴いたりして、反応を示している。</li> <li>自分の考えた思いや意図を結び付けた表現方法を生き生きと友達に伝えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の聴き取ったことや感じ取ったこと、またそれらを結び付けた聴き方を生き生きと友達に伝えている。</li> </ul>
【まとめる・生かす過程】	【他者と協働し、音楽表現の高まりや鑑賞の深まりに向けて関わること】	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の思いや意図を結び付けた表現を試したり聴いたりして、反応を示している。</li> <li>友達の思いや意図を結び付けた表現を聴いて、自分の表現を調整したり、目指す音楽表現に近づくアドバイスを伝えたりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の聴き方で聴き直し、反応を示したり自分の考え付け加えたりしている。</li> </ul>
【まとめる・生かす過程】	【学びの終末における達成感や成長の自覚】	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分やグループ、学級等で追求してきた音楽表現を聴いて、実現できたことやその実現度を振り返っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>再度曲を聴き、初発に気付いたよさや美しさと比べて、新たに気付いたことを振り返っている。</li> </ul>

#### (4) 学びのデザイン

##### ① 「自信」を深める学びを実現する学びのデザイン

音楽科における「自信」を深める学びを実現するために、以下のデザインを構想した。

##### 【題材を通して学習するよりどころとなる音楽を形づくっている要素との出会わせ方の工夫】

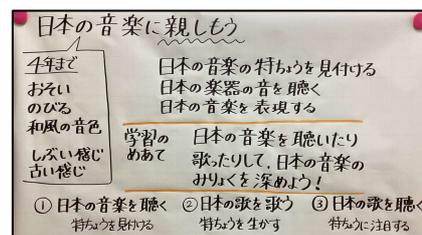
音楽科の学習では、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を軸として、題材を越えて表現と鑑賞を往還させながら表現の高まりや鑑賞の深まりを目指していく。しかし、音楽は様々な要素が関わってつくられているため、よりどころとなる音楽を形づくっている要素に着目することが難しい。そこで、よりどころとなる音楽を形づくっている要素との出会わせ方を工夫し、子どもが追求していく音楽を形づくっている要素を明確にすることで、その働きを表現に生かしたり、音楽表現を聴いて評価・判断するときや音楽を鑑賞するときの観点として用いたりすることができるようにする。また、それによって、同じ軸をもって題材の終末の理想の姿に向けて追求していくことができるようになる。と考え、【つかむ】過程で、①学年内の同系統の既習曲や②前学年の同系統の既習曲を用いて聴いたり歌ったり演奏したりして振り返り、音楽を形づくっている要素と出会えるようにする。教師が系統を意識して、既習の音楽を形づくっている要素と出会う機会を設定することで、子どもたちがよりどころとなる音楽を形づくっている要素やその働きについて意識しながら追求していくことができる。それぞれの具体例とその他の活用例は以下のとおりである。

活用例（下線は題材のよりどころとなる音楽を形づくっている要素）	
①	<p>【3年】旋律の重なりを感じ取ろう</p> <p>旋律に気付くことができるように、前題材で学習した『メヌエット』に合わせて体を動かしながら聴き、旋律の特徴について振り返る。旋律に着目して体を動かしながら本題材で扱う『かね』を聴くことで特徴の違う旋律が重なっていることに気付くことができる。</p>
②	<p>【5年】音の重なりを味わおう</p> <p>音の重なりで気付くことができるように、4年で学習した『もみじ』を歌って振り返る。音を重ねる楽しさや難しさを想起するとともに、音の重なり方を意識しながら、本題材で扱う『いつでもあの海は』を聴いたり歌ったりすることで、音の重なり方の特徴に気づき、表現に生かすことができる。</p>

##### 【学習計画を子どもと作り追求する機会の設定】

題材の終末の理想の姿を明確にし、表現を高めたり鑑賞を深めたりしていくために自分に必要なことを考える機会を設定することで、題材の目標や自分が達成すべき課題が明確になるため、主体的に学習に関わっていくことにつながると考える。今までは、教師主体の計画で授業を進めていたため、

題材の終末の理想の姿はあったものの、自分事となっておらず、題材を通しての見通しをもたずに学習を進めていた。そこで、題材を通して学習するよりどころとなる音楽を形づくっている要素と出会った後に、題材の終末の理想の姿を考える機会を設定し、子どもたちが、その姿を達成するために必要な学習の過程や内容を挙げていく。教師はそれを助言しながら整理したり、表現領域と鑑賞領域を意図的に結び付けたりしながら計画を一緒に作っていく。(図2)このように、主体的に学習に関わり、理想の姿を実現していくことができれば、「自分はできる」「努力すればできる」という「自信」を深めることができる。



〈図2 子どもと作った学習計画〉

### 【音や音楽での学びの蓄積と活用】

自分の表現を音や音楽として意識的に聴くことができれば、表現の高まりを自覚することができる。これまでの音楽科では、表現できるようになったことや聴き深まったことを文章を中心に振り返りに残し、積み重ねていた。しかし、目指す音楽表現に近付いたことを実感するためには、文章の振り返りを蓄積するだけでは不十分であると考え。そこで、題材ごとにロイロノート上で、表現できるようになったことを音や動画も含めて蓄積していく。表現領域において、思いや意図を結び付けた自分の歌声や、パートで楽器を演奏している動画、全体での合唱や合奏などを音や音楽で残していく。目指す音楽表現の実現に向けて表現を高める中で、子どもが達成感を感じたタイミングや1単位時間の授業の終末での音を蓄積していく。自分や友達同士で、録音や録画をする時もあれば、教師が全体の音楽を録音や録画して共有する場合もある。表現領域で、文章だけでなく音や音楽での学びが蓄積されることで、自分の音や音楽を前時と聴き比べたり、パートの奏法を動画で見比べたりすることができる。毎時間ごと、題材ごとの自他の成長をより実感できる。そして、音で聴いて目指す音楽表現に近付いたことを実感し、積み重ねていくことで、「自分はできる」「努力すればできる」という「自信」を深めることができる。表現領域で音や音楽で学びを蓄積しておくことで、同題材内の鑑賞領域や以降の題材の鑑賞領域でも活用することができる。

### ②教師の関わり

#### 【価値付け】

題材を通して学習するよりどころとなる音楽を形づくっている要素を明確にすることができるようになると、自他の音楽表現を聴いたり同じ観点で曲を聴き深めたりすることができるようになる。しかし、自分が聴き取ったり感じ取ったりしたことを基にした考えが正しいのか確信がもてないと、不安になってしまい表出することは難しい。子どもが他者の考えを認める関わり方をしていることや、よりどころとなる音楽を形づくっている要素と結び付けて表現の高まりや鑑賞の深まりに向かっていくことを教師が以下のように価値付けすることで、子どもが考えを表出しやすい雰囲気をつくっていくことができ、「認められている」という「自信」を深めることができる。

価値付け	表現	鑑賞
関わり方	・他者の思いや意図を聞き、音で試して共感的な反応を示していること。	・他者の聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けた考えを聞き、その聴き方で聴き直し、共感的な反応を示していること。

表現の高まりと鑑賞の深まり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目指す音楽表現の実現について思いや意図をもち、音で試し、記述したり発言したりしていること。</li> <li>・ 思いや意図をもって表現の活動に取り組んだことで、目指す音楽表現に近付いたことや表現が豊かになってきたこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聴き取ったことと感じ取ったこととを結び付けた考えをもち、発言したり記述したりしていること。</li> <li>・ 自他の聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けながら鑑賞の活動に取り組んだことで、曲を聴き深められるようになってきたこと。</li> </ul>
---------------	--	--

### 【ファシリテーターとしての関わり】

題材の終末の理想の姿を達成するために、子どもたちが必要と考えることから、子どもと学習計画を作ることによって、【追求する】過程において、子どもに学びを委ねる場面が多くなる。しかし、実際には、子どもだけで自他の音を聴きながら演奏し、音楽表現を高めていくのは難しい。そこで、子どもたちが主体となって音楽表現を試しながらつくりあげたり、曲を聴き深めたりしていけるように教師が関わっていく。表現領域では、子どもの思いや意図を把握し、目指す音楽表現と結び付けて言語化したり、思いや意図に合う表現をしている子どもを紹介したりして子ども同士の思いや意図と音楽表現とをつないでいく。また、聴く観点を示しながら、子どもの意図を音で試す機会やパートを指定して演奏をする機会を作ることで、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を生かした表現をつくりあげられるようにしていく。鑑賞領域では、子どもの聴き取ったことや感じ取ったことを把握し、違う聴き方をできている子ども同士を結び付けたり、他者の聴き方で聴けるように紹介したりする機会を作る。このように、教師がファシリテーターとして関わることで、自他の考えを音を通して認め合いながら表現の高まりや鑑賞の深まりに向かうことができると考える。

具体例 4年 「せんりつのもみじを楽しもう」  
教材曲『ファランドール』『オーラリー』『もみじ』

① 「自信」を深める学びを実現する学びのデザイン  
【題材を通して学習するよりどころとなる音楽を形づくっている要素との出会わせ方の工夫】  
同系統の前題材「せんりつの特ちょうを感じ取ろう」で学習した『白鳥』『堂々たるライオンの行進』の旋律の特徴を聴いて振り返る機会を設定した。

【学習計画を子どもと作り追求する機会の設定】  
題材の終末の理想の姿を基に右記のように計画を作った。子どもたちが考えた理想の姿を達成するために必要なことを整理して、表現領域と鑑賞領域とを結び付けながら整理して計画した。(図3)

【音や音楽での学びの蓄積と活用】  
振り返りの際に、音を録音し蓄積していった。毎時間の最初に自分の録音を聴く機会を設け、理想の姿と自分の演奏とを比較し、本時にやりたいことを見いだせるようにした。振り返りの際に、前時の録音と比べて振り返るようにした。(図4)

③ 教師の関わり  
【価値付け】

関わり方	「友達の聴き方と同じところを伝えられたね」 「友達の聴き方を聞いて、納得したことを伝えられたね」 (友達の聴き方に対する共感的な反応への価値付け)
表現の高まりと鑑賞の深まり	「オーラリーの旋律の特徴を生かすために、音が重なったときの音色をよく聴いてなめらかに音をつなげて演奏することができたね」 (思いや意図をもって表現活動に取り組んだことへの価値付け) 「王の旋律と馬のダンスの旋律が重なった面白さを感じ取れていたね」 (聴き取ったことと感じ取ったこととを結び付けられたことへの価値付け)

<図3 子どもと作った学習計画>

<図4 子どものロイロノート上での蓄積>

#### 【ファシリテーターとしての関わり】

『もみじ』は、4～5人グループでの活動を行った。旋律の重なりの特徴からひらひら舞い散るもみじの様子を表現したいという思いを表現できているかを評価・判断する機会を設けた。子どもが発表した歌の思いや意図に合う表現ができたかを問いかけたり、より思いや意図を表現するためのアドバイスを伝えるよう促したりすることで、子ども同士の思いや意図と、音楽表現とを結び付けていけるようにした。

## 4 成果と課題

本校音楽科における問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「自信」を深める学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

### ○成果

題材でよりどころとなる音楽を形づくっている要素との出会わせ方を工夫するデザインを設定したことで、題材を通して聴く観点を明確にすることができた。また、よりどころとなる音楽を形づくっている要素を基に学習計画を子どもと立てる機会を設定したことで、題材の終末の理想の姿の達成に向けて、子どもが見通しをもってやりたいことや自分たちに必要なことを考えながら主体的に学習に取り組むことができた。聴く観点が明確になることで、表現領域では、自他の音楽表現を評価・判断して、目指す音楽表現に向かっていくことができた。そして、音や音楽での学びの蓄積をすることで、音や映像で自他の音楽表現の高まりを感じ取ることができたため、目指す音楽表現に近付けたことの実感へとつながった。鑑賞領域でも、聴く観点を明確にして音や音楽を聴くことで感じ取ったことと聞き取ったこととを結び付けて曲を聴き深めることができた。また、教師が他者との関わり方について価値付けすることで、自分の聴き方を友達に伝えたり、伝えられた聴き方で聴き直したりして自分の鑑賞を深める姿も見られた。このように、表現領域と鑑賞領域で表現の高まりや鑑賞の深まりを実感し、題材を越えて表現と鑑賞を往還しながら、見通しをもってよりどころとなる音楽を形づくっている要素について追求していくことで、「自信」が深まったと考えられる。

### ○課題

音や音楽での学びを蓄積して活用することが有効であったが、自分たちの表現を聴いて目指す音楽表現に近付いているかを評価・判断する活用をした際に、技能の習得の有無にこだわってしまったところがあった。最初の録音と、子どもが自分自身で思いと意図とを結び付けた表現ができたタイミングに絞って録音することで、自分の表現を聴いて振り返ることができるため、思いや意図と結び付けながら目指す音楽表現に近付けたことを実感でき、「自信」が深まると考える。

### 【参考文献】

- ・佐藤公治（2012）『音を創る，音を聴く』新曜社.
- ・日本学校音楽教育実践学会（2024）『音楽的思考を育てる資質・能力スタンダード』図書文化.